



図書館だより



2024年11月
読書週間号②

秋草学園高等学校 図書館

今年の読書週間もあと少し。けれど、読書の秋はまだこれからが本番です。この時期は紅葉を眺めながら散歩したり、秋の味覚を味わいに出かけたりと、アウトドアで気持ちよく過ごし、やりたいことも多いです。一方、だんだんと夜が長くなるのもこの季節の特徴です。普段は手を出しにくい長編の物語を、毎晩少しずつ読んでほっこりしてみるのもよいかもしれません。図書館では蔵書点検に向けて、冬の長期貸し出しが11月12日から始まります。

読書週間後もたくさんの本と出会おう



“この一行に 逢いにきた”を標語に始まった今年の読書週間もあとという間に終盤です。図書館ではこの標語から、本の紹介に本文から印象的な一行を抜き出してみました。また、「心を揺さぶる本を！」との思いから、紹介する本のテーマは笑ったり泣いたりする心の動きにそってってみました。図書館にはまだまだ紹介しきれない素敵な一行たちがあなたとの出逢いを待っています。読書週間が終わっても、ぜひ本を開き、一生を共にできるような素敵な一行と出逢えますように、願っています。

思わず涙する、一行

932-Ⅱ 『ハリー・ポッターと呪いの子』

J. K. ローリング 著 静山社

「自分の息子の名前を——僕の親友の名前を——お二人の名前からとったのです。アルバス・セブルス・ポッターです。」(p235)

ハリーの息子アルバスと、ドラコの息子スコーピウス。二人は過去を変えようと試みますが…。HPシリーズを読んできたファンにはグッとくるシーンです。

B933-キ 『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス 著 早川書房

「ついしん。どーかついでがあったらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやてください。」(p449)

日本でも実写化した不朽の名作です。新版でどうぞ。



おいしい、一行

913.6-7 『カフネ』

阿部 暁子 著 講談社

「パフェの頂点には真っ赤な苺が女王のように飾られ、その脇には、小さな薄紅色の薔薇が三つ咲いていた。」(p66)



弟が急死した「薫子」は、遺言書に従って弟の元恋人の「せつな」に会う。冷たい印象のせつなだが、作る料理は薫子の心を暖かくさせます。ぐちゃぐちゃになったケーキも、せつなの手によりパフェに生まれ変わり、苺とりんごで作った薔薇が飾られていました。

B913.6-オ 『丘の上の洋食屋オリオン』

沖田 円 著 KADOKAWA

「先端にパンチェッタを刺し、ひと口分のカルボナーラを頬張った。まず濃厚なチーズと卵黄の味わいがいっぱいに広がった。そして、表面をカリッと焼かれ、けれど柔らかな歯ごたえのあるジューシーなパンチェッタの旨みがじゅわりと口の中に溢れた。」



(p84)

オムニバス形式で「洋食屋オリオン」のお客様のエピソードと、お腹が空いてしまうくらい美味しそうな洋食が登場します！

B913.6-ナ 『西の魔女が死んだ』

梨木 香歩 著 新潮文庫

「薄く切ったかりかりのトーストにバターを塗り、できたてのジャムをスプーンですくって載せ、ねぎらうように、まいにそれを渡しながら、おばあちゃんが言った。」(p48)



「西の魔女」と呼ばれる祖母の訃報を聞き、まいは彼女と過ごした一か月を思い出す。手作りのジャムも美味しそうですが、「おばあちゃん、大好き」「アイ・ノウ」のやり取りなど、素敵な一行がいっぱいあります。

司書の今月はこの本読みました



「プリンセスの日常が面白すぎる」とX(旧 Twitter)でバズり、最近文庫化された『赤と青のガウン：オックスフォード留学記』(B377-7 彬子女王 著 PHP)、美味しいスコーンを期待して読んでみました。しかしながら留学での真剣な研究への取り組みは、修士号を目指すはずが博士号に進路変更。大英博物館で貴重な法隆寺金堂壁画の模写を発見したかと思えば、緊張し味さえないまま英女王とのティータイムを過ごし、最終的には不撓不屈の精神で“博士論文性胃炎”と共に論文を書き上げ、博士の学位を得た証の赤と青のガウンに袖を通します。彬子女王の心構えはとても尊敬できます。ちなみに、世界一美味しいスコーン情報もありました。【鈴木】